

## あいかわらず 長い編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

無事、すらすらと三号が発行されます。凄いモノですね。世に三号雑誌なんて、潰れる代名詞のように言いますが、そんな気配は全くありません。次の締め切りは2月25日(発行は3月15日の予定です)のっけからこれですから、編集作業が楽しいのです。

第三号締め切りの11月25日深夜、もうすぐ午前0時という時間帯に、続々と律儀な執筆者から添付メールの原稿が届いていました。藤さん、浦田さん、尾上さん、千葉さん。荒木さんの、「遅刻しそうです、送信は夜明け前になりそうです」のメールには「あなたは島崎藤村か！」と返信しました。既に届いている方も多く、相変わらず快調です。これらを私は岡山からの新幹線車中、iphoneで確認していました。

あの日は夕方に京都を出て岡山行きでした。月例研修会の4回目です。18時から22時まで市内会場で4時間プログラムを実施し終えた帰路でした。私も頑張っていて、皆さんも頑張っている。なんだか良いなあと思ってしまいました。

執筆者の一人村本さんは、書いた原稿の修正版を送ってきて、「編集長が直してくれたらいいのに。誤字くらいなもの」、「わたし書いた原稿は読まないでさっさと送るからね」と、仰天なことを言っていました。

編集長ですから読みますが、いわゆる『編

集者読み』はしません。『第一読者読み』の感じですが、自分で校正して送ってください。

今回も又一本新連載が登場です。死後の世界、死とどう向き合うかの世界から、僧侶の登場です。

姫路の田舎で住職をしている竹中尚文くんとは、彼がまだ龍谷大学の学部生だった頃からのつきあいですから、35年を超えます。出会いはお互い初めての海外旅行、「シルクロードの旅」でした。ソ連だった時代のウズベキスタン・タシケントでの朝、二人で散歩に出かけて迷い、乗ったタクシーに違うホテルに連れて行かれ、危うくツアーバスに置いて行かれるところでした。(ホテルが違っていたのは、我々の行き先告知が間違っていたので、ドライバーのせいではなかったのですが)

巡り巡って今、ここでこんな風にあることを、非常に楽しく思っているところです。多くの日本人が、とりあえず生活習慣としての仏教徒である状況で、お寺や僧侶ってどうなっているのでしょうか？

彼には第三号発刊直前の12月10日、京都キャンパスプラザで連続開催している**対人援助学会定例会**でゲストスピーカーとしても話してもらいました。この**例会は年間4回(次回は2月18日、そして5月20日予定)**開催しています。演題・演者は学会hpの告知でご確認ください。そして是非ご参加ください。オープン参加、参加費無料の企画です。

11月に京都(立命館大学)で開催した「第2回対人援助学会京都大会」のワークショップ、「対人援助学マガジンの可能性」は楽しかったです。特にどなたもお呼びしたわけではなかったのですが、会場に執筆

者7人ほどが集うことになりました。参加者の皆さんと話していただける機会になりました。これからはマガジンをどう利用するかは時期に入ってくると思います。

多様な対人援助分野が、いっそう活気づいて、健全な発展をするためにはそれぞれの職種内部視点の議論だけではだめだと思っています。例えば近接職種が「家族」というキーワードなら全てつながってしまうように、新たなネットワークデザインが組み上げられていかなければならないのだと思います。

この雑誌の多様さが、専門細分化を走り続けすぎて、総合の場で機能不全になっているかに思える力を、再統合するヒントになればと思っています。思いがけない連携が、どのようなレベルであろうと、発生するきっかけになれば、この雑誌の存在意義は十分だと思っています。

記事に対するご意見、ご感想もですが、執筆者への様々なリクエストもお寄せください。

### マガジンに対するご意見ご感想

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

学会時に販売しました印刷版対人援助学マガジン(1号、2号、各1000円)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。

#### マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

#### 編集員(チバアキオ)

先日の対人援助学会では、『対人援助学マガジン』の著者の先生方にご挨拶することができた。団編集長のワークショップでは、

『対人援助学マガジン』に連載中の著者4人で話す機会があった。みんながお互いに初対面だった。そこで『ポストモダンな学びのスケッチ』を連載中の北村真也先生がおっしゃったのは「みんな初対面だけど、そんな気がしないね。どこか底の方でつながっているというか...」その発言に、そこにいた4人ともがうなずいていた。秘かに私もそんな感じがしていた。けれども、同じような思いを他の著者の方にもあるということを知ったときには本当にうれしかった。対人援助学会の基調講演をしてくださった浜田寿美男先生、中村正先生のシンポジウム、対人援助学マガジンでご活躍の先生方、それらは、私にはつながっているようにしか思えない。

先日、知っている人が誰もいないシンポジウムに行った。初めは、市長のあいさつ、次に 学長のあいさつに、その次は 所長の代理のあいさつに...というくだりを本題が始まるまでに30分取ってあった。「前の方には、著名な先生に教授に、先生...」と紹介もあった。そんな人達だけが主人公ではないだろう！私はこういう研修、シンポジウムには参加しないように極力してきたのだと思った。この経験の対極にあったのが先日の「対人援助学会 第2回大会」の1日であった。時間は有効に使うためにさっと本題に入る。これが私のこれまで泳がせてもらってきた先生方の世界のリズムであり、スタイルだ。

年4回、『対人援助学マガジン』の紙面上で出会い、年に1度ぐらい実際にご挨拶できる。その1回も、その質はただの一回とは全く異なる。1年ぶりでも、話題はいきなりコンテンツから始まる。極端に言うと

初めてでもだ。「あれは、どんな感じなんですか？」「あそこ面白かったです。そのあたりもう少し教えてもらえませんか？」そんな深く人に会うことは、毎日一緒に働いていてもないのではないか。先生・学生関係でも、数年たてば、「サヨナラ」だ。この『対人援助学マガジン』の連載と大会などのリアル世界でもつながっていくことで、さらに深く出会っていられる。そして、この先も、いつでも質の高い出会いを作り出していくことができる。さらに、この『対人援助学マガジン』の可能性は、ネット上での技術的な革新もすぐに味方に行うことができるという潜在能力もある。まだまだ、いろんなことができそうです。

こないだの編集会議では、次回以降の新連載の話しもチラホラ。いつも編集作業の仕上げは、学会事務担当の川原義彦理事がしてくださっています。本当にありがとうございます。

## 対人援助学マガジン

### No.3

#### 第一巻第三号

2010年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

赤い表紙に似合うもの。そんな発想で自分のイラスト・データを探索していたら、思い出したのが、ずっと以前に産経新聞の一面に連載していた、記事とのコラボ漫画でした。新聞の一面に漫画が掲載されることは希で、ちょっと話題にもなって、結構長く続いた企画でした。

この時は、夏バテ防止の食べ物が話題になっていたのだと思います。細かいことは覚えていませんが、一ひねり必要なので、野菜の大喜利を描きました。唐辛子、ミョウガ、そしてニンニク。ヴェジタリアンとかオバタリアン(全然違いますが)、そんな言い方の流行っていた頃のことだったと思います。

数日前、あるアメリカ人と日本語で話していたのですが、ヴェジタリアンの話題になりました。私の知っている日本人には一人もいないと言ったら、彼女は友人、知人に数人いるといいます。

そして、生家がそうなので、生まれながらのヴェジタリアンや、動物を殺して食べるのが嫌だからヴェジタリアンになった人とか、いろいろ聞きました。よく分からないし、つつこみどころもいっぱい気分でしたが、まあ私にちんぷんかんぷんということにしておきました。

2010/12/15 団士郎